

る。金ヶ崎には巖壁自然松の配合水射の濕り、とりどりに自然はしつと四季の着物を華美ならしめ、寶石たらしめる。自然の肖像は寶石なりとは大下先生の講話の一節なり、まことに自然は寶石たらしめずして、瓦石に等しいものであつたらば案外つまらぬものだと思ふ。

金ヶ崎の頂上に月見亭あり、四十二年皇太子御台臨の場所として風景は開展して、靜かなる眞晝の暑き海景の一日なれば、波の動搖は白くくづれて沖は眞帆片帆、コハルト、オリブの穩い山よりかけて近景の綠岩、此方には岩のくづれの華色の溫味、水のさわり、ふと彼方の陰より白鳥の羽音なくスート飜へれば近代人は夢より自分を見出すに相違ない。

パツィヨンの強い私には、赤き船腹の鐵鑄をそぎとる幾多の女のカンカンと響く眞晝の一時間だけでも強烈な太陽の直射のもとにはよくも眩暈せないことだと、人生の死を極端に思はしめる、女の死骸と鷗の死骸といふことは南國の悲哀であつたごとく、夏の日本海岸の赤き印象を思ふのである、死に伴ふ赤き印象のフェースは忘れられぬ事實の話柄となるであらう。

敦賀の色彩と私の感じはブランピンクの慣用色を誇ることが出來ない哀感であつたらう、近代人の色彩にたとひ個人主義が伴ふとも過激なパツィヨンはあるはづた。敦賀の町には洋館めいた建築と外國の氣分が全失して居ることは裏日本のローカルラーであらう。舶來な化粧品は少く共、地肌の白い女は多くあらう、文明の進歩に伴ふ風土の關係は文明の學者が考究して居る

が敦賀の人情は風土の關係上大差は無からう、比較的田舎ぢみて物事に穩健の處置をとつて居ると思ふ。塵埃の多い町には私等の健康状態を侵害しやうとしたが、朝夕の寒暖計の狂ひに皮膚を犯されやうとしたが、敦賀の清らなる水は永久私等の心持を透明の固體として安全ならしめたのであつた。(八月二十八日朝)

敦賀にて歌へる

長谷川繁兒

ワカゲンと假名文字にてしるされし瓦斯の灯のほのかなる夕べ

書をかける人の思想の若きよと心に笑ふわれがかなしき

松原の松のあひだにイーゼルを展けば海のなづかしき色

わが寫生せる時背にたてる人のパラソル色の日傘なづかし

金ヶ崎のいただきにわれ展望すはるかなる海よく晴れし海

正誤

『寫生畫の研究』二三四頁六行目二十七字遠は前の誤
七行目六字前は遠の誤